

目 的 これまでわが国における家業経営は、職住一致、家族経営、直系家族による世襲という特徴があり、かつての「家」意識を成立させる実体的根拠であり物質的基盤であった。しかし、現代における家族形態の変容にともなって、家業や家産の意味も変容している。本報告では、伝統的な家業経営の特徴を有し、後継者世代が顧客増員のための活発な活動を展開しているK温泉町の旅館業経営者に着目して、家業と家庭経営の現状とこれまでの変容過程を明らかにし、家業における家族の役割について考察する。

方 法 まず、K温泉町中心部の旅館7軒を対象に、訪問面接聞き取り調査と住み方調査を行い（1993年10月中旬）、先代から現在に至るまでの家業の経営体制と家族の役割、家庭経営の状況、後継者決定過程を明らかにし、後継予定者に対するヒアリングから、今後の動向について検討した。さらに、K温泉町の全旅館91軒を対象として郵送法によるアンケート調査を実施し（1993年11月下旬、回収数53、有効回答率58.2%）、家業と家庭経営の現状と今後の見通しから、家業経営における家族の役割について考察した。

結 果 訪問調査した旅館の経営者後継者ともに、旅館の継続発展への意向が強く、家業の経営と継承については伝統を維持しながらも徐々に拡大したり変容させている。女性が継承した場合は家庭経営面での変容が少ない。後継者が、家業というより自分で選択した職業として捉えている場合は、家業における家族の役割の変容が顕著である。伝統を堅持するタイプがある一方で、近年になって変容したタイプがみられた（例えば、職住分離で通勤(11軒21.2%)、後継者の配偶者が就業していない(2軒12.5%)）。